

令和2年度特別企画展「被爆樹木展 75年目の記録」について

大矢祐一郎・在岡郁雄・高井敦雄

はじめに

植物公園では、年に1度、自主企画の特別企画展を開催している。今年度は「被爆樹木」をテーマとした特別企画展「被爆樹木展 75年目の記録」を開催した。平成17年度・27年度に続き、5年ぶり3回目となる被爆樹木に関する特別企画展の開催となった。被爆75年を迎え、「75年は草木も生えぬ」と表現された広島の地で力強く生き延びてきた被爆樹木の現状や、被爆樹木に関わる様々な活動を取り上げ、現時点での記録とすることをねらいとした。会期は当初令和2年10月31日(土)から12月24日(木)までを予定していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う広島県・広島市「新型コロナウイルス感染拡大防止集中対策」に基づき、12月12日(土)から当園が臨時休園となったため、12月10日(木)までとなった。展示期間中の総入園者数は17,726人であった。

被爆樹木とは

広島市では、爆心地から概ね2km以内で被爆した樹木を被爆樹木として登録している。この中には被爆当時の場所に現存しているもの、移植を受けたものがある。また、インドハマユウのような草本も含まれている。一方、江波山にあるヒロシマエバヤマザクラのような、爆心地から2km以上離れた場所で被爆した樹木は、登録の対象から外れている。令和2年現在、約160本の木々が被爆樹木として登録されている。

展示会場について

展示品としてパネル(A1ノビサイズ)、被爆クロマツの切り株、被爆樹木の3Dモデルなどおよそ50点を展示した。パネル等の壁に設置する展示品は中心部の高さが床から約150cmになるよう配置した。

看板には、青少年センター西側の被爆シダレヤナギを一面に写した写真を用いた(図1)。爆心地から最も近い位置で被爆したシダレヤナギの力強さを表現した写真を用いて、被爆から75年の歳月を生き延

びてきた被爆樹木の生命力を表現した。写真は広島東南ロータリークラブが創立60周年記念事業として被爆樹木写真展を企画した際に撮影されたもので、その後広島市に寄贈されたデータの提供を受け使用した。看板はデザイン・印刷ともに当園で作製した。原稿の作成にはMicrosoft PowerPointを使用した。印刷にはCanon社製大判プリンターimagePROGRAF iPF6400を使用した。フリーレイアウト機能により、A1ノビサイズで作成した原稿を看板面のサイズまで引き伸ばしたものを一部重なるように用紙幅で3分割して印刷し、両面テープで貼り合わせた。看板の躯体として、高さ2.3m×幅0.9mのパーテーションを横に2枚並べて固定したもの(高さ2.3m×幅1.8m)を使用し、印刷原稿をピン止めした。完成した看板は繋ぎ目もほとんど目立たず、展示終了まで劣化することなく掲示することができた。

被爆樹マップの配布と被爆樹木の紹介

前回の被爆樹木展の際に配布し、好評を博した「被爆樹マップ」の配布を今回も行った(図2)。このマップは、被爆樹木の保護活動の支援を目的とした「緑の伝言プロジェクト」の活動の一環として制作されたもので、平成27年度の被爆樹木展の際に許諾を得て一部改変し、増刷したものである。製作から時間



図1 展示会場に設置した看板

が経過しているものの、実際に被爆樹木を見て回る上で非常に便利であるため、承諾を得て当園で保管されていたマップを再配布した。マップは東周り・西回りの2種類があり、その両方を展示室内にて配布した。来場者からは好評で、会期半ばにして準備していたマップ各800部の配布がほぼ終了した。被爆樹マップの配布に合わせて、被爆樹木を紹介するパネル展示を行った(図2)。この紹介パネルは、「緑の伝言プロジェクト」から許可を頂き被爆樹マップ内の写真やイラスト、文字データなどを利用して制作したもので、前回の被爆樹木展の際にも活用したものである。展示会場の様子をうかがっていると、今まで出会ったことのある木々が実は被爆樹木として登録されているものだったと初めて気付く来場者の様子をたびたび目にした。

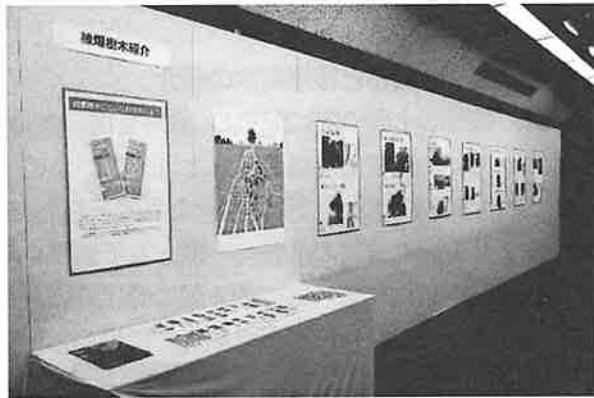


図2 被爆樹マップの配布と被爆樹木の紹介

饒津神社の被爆クロマツの切り株展示

展示手法に変化をつけ、実物の持つ説得力を生かしたいと考え、饒津(にぎつ)神社の被爆クロマツの切り株展示を行った(図3)。この切り株は、平成15年に枯死した被爆クロマツを切り株として残していたもので、樹木医の堀口力氏が保管されているものである。1945年から被爆後の十数年間に渡り年輪幅が異常に狭まっており、被爆の実情を伝える資料となっている。堀口氏のご厚意により、前回に続き展示させていただくことができた。前回、被爆後に年輪形成異常が生じている箇所が分かりづらかったという反省があったため、当該箇所を示すパネルを新たに制作し切り株とともに展示した。切り株の台座として、輸送用平パレット2枚をタフニールで覆ったものを使用した。



図3 饒津神社の被爆クロマツの切り株展示

被爆樹木の樹勢回復事業の紹介

広島市市民局国際平和推進部平和推進課が取り組んでいる、被爆樹木の樹勢回復事業の紹介を行うパネルを展示した。被爆樹木は生き物であり、老化や生育環境の悪化などにより枯死の危機が迫っているものもある。手を施さなければ枯れてしまうかもしれない木々を見守り、支えている人たちの存在を知ってもらうためにこのコーナーを設けた。この展示により、樹勢回復に向けた取り組みやその進捗状況、樹勢の回復具合などに注目が集まることとなれば幸いである。

被爆樹木に関する最新の研究成果について

研究対象として被爆樹木に注目している方々の取り組みを紹介する目的で、筑波大学芸術系名誉教授鈴木雅和氏、東京農業大学地域環境科学部造園科学科教授國井洋一氏ならびに同大学院生古賀大誠氏に協力をいただき、「3次元データを活用した被爆樹木研究の歩み」と題する研究成果をまとめた展示を行った。研究内容を紹介する3枚のパネルに加えて、ディスプレイに出力した3Dモデルの展示や、3Dプリンターにより制作された広島城の被爆クロガネモ

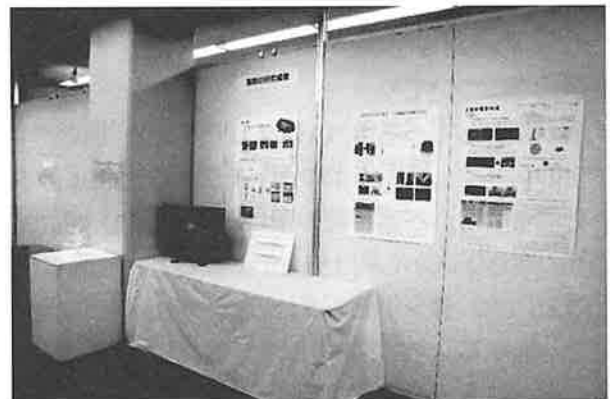


図4 被爆樹木に関する最新の研究成果の紹介

木の模型の展示を行った（図4）。被爆樹木の3Dモデリング研究により、樹形の正確な記録が可能となり、その後の変化を追跡し樹木の健康状態やその後の管理の科学的な判断材料とすることが可能になると期待される。また、3Dモデルや模型を利用すれば場所を問わず被爆樹木の樹形を観察することが可能となるため、今回のような展示会等の場において被爆樹木を紹介する際の有用なツールになるとと思われる。

被爆樹木を題材とした芸術作品の展示

被爆樹木に関する企画展という、実物そのものを展示会場に持ち込むことが困難な企画の性質上、知識を紹介することに偏った単調な展示になることが懸念された。そこで、被爆樹木を題材とした芸術作品の展示を行うことを試みた。今回は、被爆樹木を題材としたフォトグラム作品「呼吸する影」の制作に取り組まれている美術家の浅見俊哉氏に協力を頂き、被爆樹木のフォトグラム作品8点を展示した（図5）。印象的な青を用いた作品の展示が今回の企画展の記憶として来場者の心に残り、被爆樹木やそれに関わる人々の取り組みを思い起こすきっかけになれば幸いである。



図5 被爆樹木を題材としたフォトグラム作品「呼吸する影」の展示（浅見俊哉氏作）

被爆樹木に関わりのある団体の活動紹介

様々な形で被爆樹木の保護や普及啓発に関わる団体の活動を取り上げた。本企画展では、「平和首長会議」、「グリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアチブ」、「広島東南ロータリークラブ」、「緑の伝言プロジェクト」の取り組みについてパネルを中心に紹介した。

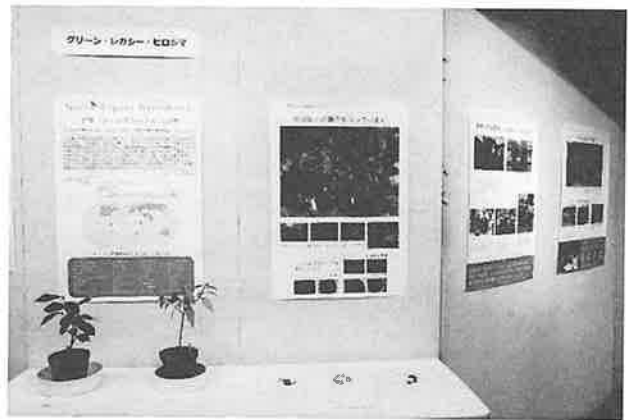


図6 グリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアチブの活動紹介。手前に見えるのは当園で管理されている被爆樹木の苗木と種子

平和首長会議は広島市長が会長を務める国際平和NGOで、同会議の加盟都市に対し被爆樹木の種や苗木を配付する「被爆樹木二世の苗木の配付事業」に取り組んでいる。今回、これまでの取り組みの成果を紹介した。

グリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアチブは世界中の学校や公共施設などに被爆樹木の種や苗木を届ける活動を行っている任意団体で、当園もワーキンググループメンバーとして活動に関わっている。これまで36の国々に被爆樹木の種や苗木を配付しており、これまでの取り組みの成果を紹介した（図6）。

広島東南ロータリークラブは2020年2月1日に創立60周年を迎え、被爆遺産である被爆樹木の平和への意味の認知を拡大するための記念事業として、広島と長崎の爆心地の中間点である福岡県築上郡上毛町に、両市の被爆樹木の苗を植樹した記念スペースを設け、新しい平和への拠点とする「未来へつなぐ平和の架け橋事業」の実施、ならびに旧日本銀行広島支店での「被爆樹木写真展」の開催を行った。本企



図7 緑の伝言プロジェクト ポスター展示

画展に際して、「未来へつなぐ平和の架け橋事業」と「被爆樹木写真展」の際に用いたパネルを借り受け、展示に利用した。

緑の伝言プロジェクトは被爆樹木保存活動の支援を目的とした中国新聞社と中国四国博報堂との共同広告企画であり、取り組みの紹介として直近5年間のポスターを提供いただき、掲示を行った(図7)。

記念講演会「被爆樹木を守る」

11月23日(月・祝)に特別企画展記念講演会「被爆樹木を守る」を園内講堂にて開催し、樹木医の堀口力氏に講師を務めていただいた(図8)。被爆樹木の現状や樹勢回復に向けた取り組みなどについて写真やエピソードを交えながらお話しいただいた。講演終了後も質疑応答が活発になされ、被爆樹木に対する関心の高さが伺えた。参加人数は52名であった。



図8 堀口力氏による講演会の様子

おわりに

当園で開催された前回の被爆樹木展から5年が経過し、被爆樹木を取り巻く環境にも変化があった。本企画展では、最近5年間の出来事を中心に被爆樹木についての情報を取りまとめ、改めて紹介を行った。本企画展の開催により、被爆樹木に関わる多くの方々の取り組みの状況を現在の記録として残し、被爆樹木を守り、広める活動をしている方々の様子を将来に伝えることが出来れば幸いである。また、本企画展が植物公園で開催されたことで、これまで被爆樹木に関心のなかった方々の目に触れ、興味を持つきっかけになればと願っている。

末筆ながら、本企画展の開催にあたり、展示品の貸し出しや展示内容に関する相談について快く協力して頂いた協力者の皆様に心より感謝を申し上げます。

す。

協力者一覧

後援 広島市、公益社団法人日本植物園協会

協力 浅見俊哉氏(美術家)、國井洋一氏・古賀大誠氏(東京農業大学)、グリーン・レガシー・ヒロシマ・イニシアチブ、鈴木雅和氏(筑波大学名誉教授)、特定非営利活動法人ANT-Hiroshima、広島市市民局国際平和推進部平和推進課、広島東南ロータリークラブ、広島平和記念資料館、平和首長会議、堀口力氏(樹木医)、緑の伝言プロジェクト